新しい自由な発想で

Have a New Conception Freely

金 綱 久 明

繊維学会から「シニアが語る新春放談」の原稿依頼を受け、しばらくして、繊維学会事務所の夢をみた。事務所で
の会議が強く印象に残っていたのだと思う。一番強い印象
は年次大会の計画実行のときのことである。

昭和50年4月、新理事会が発足し、筆者が報文担当理
事に就任して間もない時期に、理事会・運営委員会で、繊
維産業の置かれている厳しい状況の中で、これに対応する
学会の役割、活動を考え、学会をもっと活発にする一環と
して、年次大会も実行委員会をつくり、計画を立て、実行
して行くべきではないか、と云うことが議論された。実行
委員会では思う存分、「新しい自由な発想」を出し合い、
計画を練って欲しい。理事会として全面的にバックアップ
して行くことになった。ちなみに、昭和50年の年
次大会における研究発表部門は、繊維物理(構造・物性、
集合体の物性)、繊維化学、紙およびパルプ、紡織・繊維
機械、染色、仕上加工、の6部門。会場は国立教育会館2
会場、期間2日で、発表件数65、参加者は約150名であ
った。

昭和51年年次大会に向けて、筆者が実行委員長を受け
ることになり、大学、民間企業・公共機関の研究所の方々
14名を実行委員にお願いし、これに事務局の方が加わり、
16名で委員会が発足した。

今までより、発表件数、参加者とも倍増させ、大会を活
発化させることをめざし、発表会場3、期間3日とし、独
立採算で行うことになった。これを実現するため、17時
半頃から、終電で各自が帰れるぎりぎりの時間まで、意見
を出し合い、真剣な議論が何回かつづけられ、一応の結論
に達した。

研究発表の部門は、従来の部門を整理し、通常部門とし
て、繊維物理、繊維化学、紙・パルプ、素材合成、紡織・
繊維機械、染色、仕上加工、消費科学、の8部門とし、こ
れに発展しつつある新分野、あるいは繊維にかかわりの大
きい周辺新分野を「特定テーマ」として、生体関連繊維材
料、フィルム技術と特性、改質繊維、高強度繊維材料、複
合材料、染色加工における省エネルギー・環境公害、縫製
の科学と技術、繊維の特性と測定手段の8部門を選んだ。

HISAAKI KANETSUNA

工学博士

〒235-0024 横浜磯子区森が丘

2-10-20

Tel: 045-842-9551 Fax: 045-842-9551

〈専門〉繊維・高分子の構造と物性、
熱測定

〈趣味〉謡曲と仕舞

発表の形式は、一般研究発表(15分発表討論5分)のほか、
続けて行われている一連の研究については、その研究の流
れを理解しやすくするため、総合研究発表(25分発表討論
5分)と云う形式を取入れた。

結果として、全体の発表件数は昭和50年の倍を超える
150件、参加者は2倍を遥かに越える約400名になった。
会場は少し狭いところもあった。討論は活発であった。

昭和52年度からは、学会での実力者の方々が実行委員
長になられ、年次大会が実行された。昭和52年は4会場
3日、昭和53年は5会場3日、昭和55年には7会場3日
になった。昭和56年には、各部門にテーマ講演が設けら
れ、これが発展し、昭和59年から「シンポジウム」が設
定された。さらに昭和59年には、ニューテック'84「ポ
スターセッションと新製品展示」が設けられ、展示企業16
社、16件の発表があった。

昭和61年には、繊維学会宮崎基金国際シンポジウム(当
該シンポジウムに*印)が設けられた。通常部門78件、特
定テーマ51件、シンポジウムでは、バイオテクノロジー
18件、オプトエレクトロニクス*42件、膜38件、生体繊
維12件、総計239件の発表・講演があった。参加登録数
は年次大会548名、各シンポジウムはそれぞれ103名、127
名、50名、29名であった。

昭和62年年次大会では、発表部門の通常、特定の区別
が無くなり、新分野も加味され、17の発表部門が設けら
れた。また、シンポジウムに感覚と計測が加えられた。

年次大会は順調に推移し、平成10年には8会場3日、
発表部門20、シンポジウム5、若手発表会、「人間・環境
重視型繊維開発技術」のポスター展があり、日程びっしり
の年次大会が行われた。参加者767名。そして、年次大会
は24年続いた国立教育会館を離れることになった。

平成11年以降、年次大会は千葉、京都、浜松、東京、
京都、東京、岐阜、東京、東京で行われた。繊維学会創立
60周年記念行事の時を除くと、8~10会場3日で、この中
に展示ホールなども含まれている。発表部門も毎年検討が
加えられていることがみられ、平成16年から、最先端新
素材であるナノファイバーが加えられている。筆者は平成
11年以降には3回しか出席しておらず、学会誌上でその
発展の様子に接し、発表題目の変化に注目し、繊維と工業
の総説などで勉強させてもらっている。

年次大会は大きく発展してきた。年次大会そして繊維学
会・繊維産業界発展のために、33年前の理事会の指示は
今でも通用することで、時代の進歩に即応した「新しい自
由な発想」を持って、会員の方々が学会活動に参画される
ことは、なによりも大切なことと思います。